

ペリーの率いるアメリカ艦隊が、条約締結を求めて2度目の日本来航をした嘉永7年（安政元年、1854）の8月4日、江戸時代を代表する漢詩人が津山を訪れました。その人物の名は広瀬旭莊。日田（現在の大分県）に咸宜園という私塾を開いた学者として有名な広瀬淡窓の実弟で、優れた学者でもありました。旭莊は永年にわたって『日間瑣事備忘』という漢文の日記を書き残しており、津山での逗留のようすも詳しく書き記しています。

旭莊とその弟子たちの一行は、閏7月25日に大坂を出発し、明石や姫路を経て津山を訪れました。閏月をはさんだ8月ですから、現在の暦ならば10月の初めごろにあたります。河辺から川崎・玉琳を通じて城下町に入った旭莊は、津山城の堀に面した大篠屋という旅籠に入ります。そして窓から堀を眺めていると、大きな魚が泳いでいるのが見えたこと記しています。

さて、旭莊は出雲方面への旅の途中だったので、旭莊の来訪を知った津山藩士をはじめとする若い文人たちに勧められ、しばらく逗留することになったのです。優れた学者を迎えた若者たちは、毎日のように旭莊のもとを訪れて飲んで語り合いました。そして彼らの多くは、のちの津山で名の知れた学者や文化人となっています。

漢詩だけでなく書にも優れていた旭莊は、各地で書の揮毫を求められ、その礼金で旅を続けていました。それは津山においても同様で、かなりの数の揮毫が記録されています。それらの多くは扇に書かれた簡単なものですが、なかには拓本にするために書を求められたこともありました。

津山城百聞録

～広瀬旭莊の津山逗留～



▲広瀬旭莊の漢詩の拓本



何かと旭莊の世話をしていたある人が、児島高德の故事を漢詩にしてもらい、拓本を作りたいと旭莊に申し出たのです。この話はうまく進められることとなり、彫りを任された職人は旭莊が出発する前に仕上げようと頑張ったので、数日で拓本は完成し旭莊のもとにも届けられました。

旭莊は、津山の人は人情が厚く、ていねいであることと記しています。なかでも旭莊の世話をしていた二人に対する評価は高く、数日して出発するつもりであった予定を変更して、津山に17日間も逗留したのは、その二人のためであったと書いています。様々な人との交流の合間に、旭莊は城下町のみではなく、高野神社や院庄なども見て歩き、そのようすを書き残しています。

そして8月21日、綾部から加茂を抜けて奥津、そして伯耆へという道筋を定めると、名残惜しむ人々に見送られ、旭莊一行は津山を旅立って行きました。

※旅先である期間とどまること

つやま 広報

9月



編集・発行（毎月10日発行）
津山市企画部市長公室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>



健康だけが取り得だった20代。でも三十路を過ぎて身体のおちらこちらに異常が…。やはり運動を必要としているのでしょう。極暑だった夏祭り取材で歩き回るくらいじゃ駄目か…。週に一度はプールで泳ぎたいものです。(X)



スポーツの秋、到来！時間を見つけて運動を、と言いながら、毎年「食欲の秋」で胃袋だけが運動を。今年こそ本当の運動をしたいと思います。でもプールで(X)さんに会うのは恥ずかしいので、私は卓球にしよっと。(e)



つぶやき 編集室

広報紙の作成も今月で4冊目になりました。「編集後記」読んでますよと声をかけられます。つたない文書で恐縮ですが…。いつも校正作業の終盤、眠い目こすって書いています。これからもう愛読よろしく。(二七)



7月中のひとの動き

人口 111,135人(前月比△38)
男 53,038人(同△8)
女 58,097人(同△30)
世帯 43,416世帯 (同+37)

転入 282人 転出 329人
出生 86人 死亡 77人

(8月1日現在)



広報つやまは、環境保護のため古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください

